

近代日本版画の成立については、木版画を主流とする創作版画運動の勃興が主な起点としてこれまで説明されてきた¹。工芸的要素の強い版画が美術の一分野として受け入れられる過程において、西洋の主流な版画技術である銅版画の普及が大きな意味を持ったと考えられる。近代日本版画の成立に銅版画の普及がどのような意義を持ったかを明らかにすることが、本研究の大きな目的となる。そこで本発表では、銅版画の普及に尽力した西田武雄(1894-1961)に着目したい。

西田武雄は、銅版画普及活動を行ったほか、日本ではじめて洋画商を起業し画家、美術史家、編集者、起業家としての顔を持ち、戦時下で結成された日本版画奉公会では常務理事を務めた。多岐にわたる活動を行った西田について、個別の活動を取り上げ、それぞれの分野における評価軸に照らすだけでは、十分に評価され得ない。しかし、多くの事業の中でも西田が最も心血を注いだのは銅版画普及であり、その他の多様な活動もすべて、版画制作の環境を整備するための総合的な芸術運動の一部と位置づけることにより、その活動の新たな側面が描き出せるのではないだろうか。そのように読み解き直すことにより、西田の活動を通じて、版画がひとつの零細産業として立ち上がるプロセスの一側面を確認したい。本発表では、水彩画家として歩み始めた西田が銅版画に注力するようになった時代背景を考察し、①市場の開拓、②教育機関との連携、③雇用の創出という三点から西田の活動を振り返る。

①市場の開拓

大正期に文部省美術展覧会や光風会などに水彩画や素描を出品していた西田は、洋画には市価がなく、画家の定めた値段を展覧会場に付することで売買が成立するという、洋画市場のない状況に強い問題意識を持つ。そして、1924年、国内ではじめての洋画商・室内社を開業する。洋画商として西田は、委託販売をする他、1925年の故芝川照吉氏の洋画売立展を嚆矢として、1928年に松方コレクションの売立を行い大きな収益を上げた。また1942年には、求龍堂とともに第1回洋画糶売会を開き、日本ではじめての美術オークションを行った。また、丸善主催の洋画展覧会「燕巢会」の事務や自身が蒐集した明治美術関係資料を紹介した「明治初期洋画発達資料展」を開催するなど、展覧会という手法を用いた洋画の普及も行った。さらに、1927年には質屋の形式をとった美術品専門の金融機関を設立するなど、洋画商のパイオニアとしてさまざまな事業を展開した。

②教育機関との連携

身近な用具と材料で制作される木版画と異なり、銅版画普及のためには用具である廉価なプレス機の開発が必要と考えた西田は、自ら国産プレス機の製造と販売を行い、200台以上を売上げ、そのうち約120台は教育機関へと納品した。また、銅版画の啓蒙と普及を目的として創刊した『エッチング』誌には生徒や教師らアマチュアの作品を積極的に掲載するだけでなく、本誌を教育機関へと無料配布した。さらに、プレス機の納入先を中心に、各地で出張講習会を行った。その結果、1933年に開校した西村伊作の文化学院のように、定期的に講習会を行う学校も登場し、学習院も1935年までには西田の研究所より3台のプレス機を購入し、正課として銅版画を授業に取入れた最初の学校となった。

③雇用の創出

洋画家や版画家が制作だけで生活を支えることが困難であったために、西田は、1938年、広山インキ株式会社を設立し、銅版画普及運動のための資金を稼ぐだけでなく、積極的に版画家や美術苦学生を採用し、彼らの働き口を提供した。実際に、今純三や関野準一郎ら、版画家たちの労働場として機能し、一時的ではあったが彼らの生計を支えた。

このように西田は、銅版画普及に関わる直接的な事業のみならず、洋画商やインキ会社の 起業などを通じて、近代の美術制度を支える柱である美術史学、美術市場、美術教育、展覧 会のいずれにも関わりながら、銅版画の普及に携わった。

1 たとえば、近代日本版画史の基礎文献のひとつである小野忠重による『近代日本の版画』（1971、三彩社）は副題を「新芸術運動としての創作版画」とし、創作版画運動を近代日本の版画の黎明として位置づけている。